地域への＜責任＞意識が導く「当たり前」の「拡張」
—大槌町吉里吉里地区の震災復興に関する考察—

Consideration of revitalization in Kirikiri
led by residents expanding their roles on the basis of “engagement”

学籍番号　47-166759
氏　　名　湯本 真知（Yumoto, Machi）
指導教員　清水 亮 准教授

１．研究の背景・目的

東日本大震災から 7 年弱が経過した。多くの津波災害の被災地では、この 1，2 年の間に嵩上げ工事が漸く完了し、街並みの再建が一気に進んだ。そのような地域では、外部支援者の減少や、各自治体主導の地域コミュニティ作りを推進する行政の施策も相俟って、地域コミュニティの維持または創設や、住民参加のまちづくりの重要性が謳われている。しかし被災地の状況が刻々と変化する現状において、それらが上手く機能し続けている事例は数少ない。そこで、本研究の目的を以下の 3 点に設定する。

（1）震災によって大きな被害を受けても、地域住民自身が担い手となって復興まちづくりを進めていこうとする地域において、その住民を支えている地域の仕組みそのものや、その仕組みを成り立たせうる地域住民の思想を明らかにしていく。また、その思想が如何にして地域の中で成り立ちうるのかについても考察を行う。

（2）上記（1）で明らかにした地域住民自身を支える思想が、これまで様々に定義されてきた「復興」という概念とどのように交わっているのかを捉え直し、一般に「復興」を考えていくうえでの新たな視点を提供する。

（3）対象地の経験から導き出された「復興」概念が、広く地域住民中心の「復興まちづくり」を考えていくときに、どのような示唆を与えうるのか検討する。

２．研究手法と事例地について

岩手県大槌町吉里吉里地区を対象地とし、フィールドワークによるヒアリング及び参与観察（2015 年 11 月～2017 年 11 月まで 13 回）、電話調査や文献調査を実施した。

吉里吉里地区は、大槌町の中心部から山を隔てた先にある、人口 2,000 名程度（震災前）の集落である。

大槌町は、先の東日本大震災で、被災自治体のなかでは唯一町長が亡くなっており、役場も津波で被災するなど、町を中心とした迅速な復旧や復興が難しい状況にあった。吉里吉里地区でも死者・行方不明者は 100 名に上り、地区の 4 割近くの建物が被害を受けた。しかし吉里吉里地区では、震災直後からその自立性と機動力が注目を浴び、他の地区では不可能であった地区の行事を早い時期に復活させたり、震災後時間が経過してからも、町内会の再編を役場の指示を待たずに働きかけたりするなど、町内でも特に住民が中心となった復興まちづくりが機能しているとされる。なお、2017 年には

最大 9mの嵩上げを伴う土地区画整理事業や防災集団移転事業が完了し、街並みの再建が急ピッチで進められている。

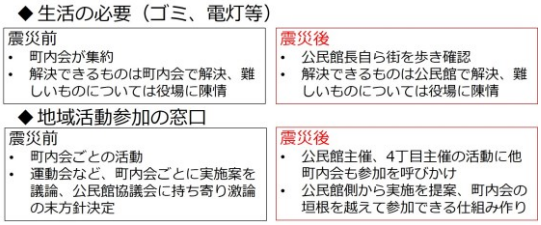
３．吉里吉里地区における復興のありかた

吉里吉里地区では、①**「流動的補完性」をもつ地域自治組織**、及び②**住民自身による＜必要（ニーズ）＞の「発見」**によって、地域住民が担い手となった復興が実現されてきた。以下に概観する。

①　「流動的補完性」をもつ自治組織

吉里吉里地区では、震災前から自治組織の活動が活発であった。同地区では、地区全体を管轄する公民館と、住民たちが自らの生活の必要に応じて昭和 44 年以降に自主的に設立した 5 つの町内会が、二重に機能していた。公民館と町内会は原則として独立しており、地区全体の行事や活動を行う際には公民館を中心とした結束がなされるという構造であった。なお、公民館・町内会いずれも運営は 30～60 代で、「動ける」組織であることが必須である。

しかし、震災によって、各町内会の拠点も流失等の被害を受けた。また、住民がばらばらに避難・移住したことも重なり、1～3 丁目町内会では従来通りの町内会活動継続が困難になった。このような状況下で、震災以前の活動範囲を越境し、町内会の肩代わりをしたのが公民館であった。



町内会が失われても、公民館が従来の活動範囲を一時的に越境し「拡張」することによって、従来の自治組織が失われた穴を補っている。そして、公民館長らが中心となって役場に働きかけ、今年度には街並み再建後の新たな町内会創設の枠組みが定まりつつある。

このように、吉里吉里地区では、もとより公民館を中心とする自治組織が備わっていた。震災を経て一部町内会が機能停止に陥っても、公民館と町内会とが、公民館が従来の活動範囲を一時的に「拡張」しているような「流動的補完性」の関係にあったことで、従来行われてきた住民主体の活動を完全に喪失することなく維持することができた。

②　住民による＜ニーズ＞の「発見」

旧来の自治組織が活動を拡張しただけではなく、吉里吉里地区の住民には、既存の自治組織が行ってきた活動だけでは網羅できない＜必要（ニーズ）＞を「発見」する人々が現れた。例えば、大槌町立吉里吉里学園（小中一貫校）でPTA顧問を務めるA氏は、PTA会長という立場から、震災後の子供の学力低下及び生活態度の変化や、それを「仕方ない」「可哀想」と当然のように扱う親や学校の風潮に、それでは将来的に子供たちのためにならないという危機感を抱き、そこで、週末・休暇中の子供たちの学習支援やサマースクールを主宰し、学生ボランティア受け入れも現在まで継続している。他にも、母親たちの居場所づくりや内職仲介を行うM氏や、各自の事業と両立しながら、地域見守り隊、大槌お宝マップ作成、町内小中学部ふるさと科講師、砂の芸術祭企画・運営、行政を通さず迅速に提案を実現する地域の窓口、等の様々な活動を担う「はまぎく若だんな会」など、吉里吉里地区では、現在進行形で住民が自ら＜必要（ニーズ）＞を「発見」し、活動へとつなげている例が見られる。そ

して、実は①の「流動的補完性」も、組織の内部において＜必要（ニーズ）＞を「発見」する住民の姿勢に支えられているといえる。そして、①，②で見てきたような、住民自ら＜必要（ニーズ）＞を「発見」し、具体的な活動を続けている住民は、これらの行為はあくまで**「当たり前」**であるという。

４．住民にとっての「当たり前」

ここで、吉里吉里地区の住民にとって震災前から続く「当たり前」とは何であったのかを、筆者がこれまで行ってきたヒアリングから分析した。その結果が以下である。

複層的な「回帰的な時間」
＜場所性＞
- 景観（海）と景観に紐づく経験の履歴
- 生業とのかかわり
- 帰ってくる場所（日常の仕事、進学や就職で一度離れた後）

＜機能性＞
- 隣近所との「顔の見える」付き合い
- 地域を把握する力
- 地域が子供を育てる
- 潜在化されたニーズ

＜地縁的結合＞
- 独立心の強さ、閉鎖性
- 強力なリーダーの存在

吉里吉里地区の「当たり前」は、定期的（毎年、毎月、毎日）に同じ行為を遂行する複層的なルーティン（「回帰的な時間」）及び「回帰的な時間」を意味づける＜場所性＞＜機能性＞＜地縁的結合＞によって支えられていることが明らかになった。

翻って、吉里吉里地区の住民が語る「当たり前」について、再度分析を試みる。

先述のＡ氏は、自身が震災直後からずっと、「当たり前」のこととして活動を行ってきたと述べている。しかし、彼の語りを分析すると、彼のいう「当たり前」は質的な転換を遂げていることが分かる（図※参照）。同じ「当たり前」とう語りのなかにも、過去の「当たり前」を再構成し、それを蘇らせるか維持しようとする営みと、将来に向けた「再構成」を行おうという営みの、質的に異なる２つの営みが、シームレスあるいは同時的に展開し、やがて前者から後者へと転換していくのである。この２つの質の異なる「当たり前」は、他の住民の語りからも読み取れる。吉里吉里地区の住民は、ただ再構成した過去の状態を満たしたらそこで活動を終えるのではなく、「当たり前」の営みのなかで、将来に向けた活動までを引き受けてしまっているのである。そして特筆すべきは、それを住民が「当たり前のことである」と語ることができてしまうという点にあろう。（↓※）

表現	「当たり前」の再構成	「当たり前」の将来に向けた「再構成」
視点	過去	将来
内容	震災前にあったはずのものを現在の視点から再構成し、蘇らせるか継続する行為	過去を参照しながらも、より良く行い、次（翌年や将来）につなげようとする行為
語りの例	*「震災前と同じ行事はすべて、小さくても、種目が減ろうが午前中で終わらせようが、やろう。やらないっていう思い出にはしたくない。」*	*「去年あんだけ大変なんだけどここまでできたから、今年はもう少しできるよね」「それが毎年の積み重ねで今がある」*
本稿の捉え方	「復旧」	**「復興」**

しかし、当然のことながら、震災を経たこの地域で求められているのは、「マイナスからのまちづくり」だ。震災で失われたものを取り戻すという過程においても、そこから将来に向けた「再構成」を行うという過程においても、従来の「当たり前」と同じことを行っているだけでは対応できないはずである。「当たり前」と語ってはいながらも、表面化した＜必要（ニーズ）＞を発見し、それに無我夢中で応答するなかで、彼らは自らの「当たり前」の範囲を「拡張」させている。

５．なぜ「当たり前」を「拡張」できたのか

「当たり前」を「拡張」できた要因を考えるにあたり、通時的（「当たり前」が存在すること）、共時的（「当たり前」を「拡張」すること）の２つの観点から考察を試みる。通時的な観点からは、吉里吉里という地域が過去の大きな津波災害の際にも集落を中心とした復興を遂げてきたこと、災害とは異なる文脈でも自身の生活の不便を自ら解決しようとしてきたこと（町内会や通勤会議

等)、「地域のことは地域住民がやる」という意識が、地域や家庭の中で世代を超えて引き継がれてきたことによって「当たり前」が成立したことを見てきた。そして、この「当たり前」を「拡張」できる要因について、＜約束・関与＝責任 engagement＞（似田貝2008)を用いて考察する。吉里吉里地区で中心的に活動を行う人々は、既に地域内部の関係性のなかで、或いは自身も当事者となるなかで、必然的に地域の＜必要(ニーズ)＞に関与せざるを得なくなる。ゆえに重要なのは、＜必要（ニーズ）＞に関与せざるを得ない人々が、＜責任＞を実際の行為によって果たし続けることができるようになるという点にある。吉里吉里という地域で起こっているのは、地域の中心となって活動を行う人々が、＜必要(ニーズ)＞を「発見」し、その＜必要（ニーズ）＞に応答する存在としての地域における自己の役割を自覚すること、そして、その役割を果たす行為が、自身も含めた吉里吉里(あるいは大槌町)という地域全体に何かしらの意味を持っていると実感できることである。そのことが一層、その役割を地域から期待されていると認識することにつながり、更にその役割を全うしようという意識につながる。このように、役割を果たそうとし続けることそれ自体が、実際の行為によって＜責任＞を果たし続けていくということである。そして彼らは、単に過去の「当たり前」を再構成するためだけではなく、将来を「再構成」するという形で一度引き受けた＜責任＞を引き受け続ける、＜強くあろうとする主体＞である。吉里吉里の「当たり前」を「拡張」する主体的な復興は、この＜強くあろうとする主体＞の存在に支えられていると言える。

６．「復興」の再定義及び今後の展望

吉里吉里地区で目指されている復興は、住民の語りを参照すると、「震災前から地域が抱えていた課題を視野に入れながら、将来起こりうる課題までを考慮した地域のありかたを考え、実践に移していくこと」であると言える。この思想は、「当たり前」の「再構成」の文脈とも通じる（※参照)。この「復興」の主導権を握るのは、吉里吉里地区の場合は、行政でも外部支援者でもなく、「当たり前」の思想を持った住民なのであろう。

吉里吉里地区では、この「当たり前」の意識を継ぎ、次の世代を担おうとする若手が育っていることは確かである。ただその一方で、人口減少や世代による意識の違いから、従来通りの地縁的結合が維持できるかは不透明である。吉里吉里地区のような主体性の他地域への展開可能性を考えると、同地区ですら維持可能かが不透明であるのに、＜責任＞を引き受ける覚悟と意志がない地域に、この仕組みをそのまま移植するのは難しいと考えられる。

しかし、復興をハードやソフトといった側面で切り取るのではなく、単に「過去」を取り戻すだけではない、過去に地域が抱えていた課題も内包しながら、将来を「再構成」するという視点に立った「復興」の在り方は、今後いかなる災害でも必要な視点となってくるだろう。

参考文献

川島秀一，2011,「浸水線に祀られるもの--被災漁村を歩く(上)（特集 東北の海--東日本大震災(2))」『季刊 東北学[第2期]』29：27-37.

J.P.サルトル，伊吹武彦訳，1955,『実存主義とは何か』，人文書院.

似田貝香門,2008,『自立支援の実践知』東信堂.